

カナヘビの飼育

めるへの森幼稚園（宮城県仙台市）

[3・4・5歳児]

チョウの飼育を通して命の循環や餌づくりへの興味が広がってきた子どもたちと、今度は、園庭に出てきたカナヘビを飼ってみることにした。3・4歳児は初めて見る幼児が多く、興味津々である。

カナヘビが脱皮を始める（6/10）

「すごーい！頭の皮がむけてるー」
「これが脱皮って言うのー？」
「何で、皮ってむけるの？」
「今日はどこまでむけた？」

餌やり&餌探し

クモやバッタを捕まえてケースに入れると、
「カナヘビが、クモを見てるよー」
「あっ！！食べた！」
「ペロをぺろぺろして、口の周りをなめてるー」
「美味しかったのかなー？」
毎日のように、餌探しと餌を食べる様子を観察している。

カナヘビが産卵する（6/19）

「すごーい！本当だー！卵、産んでるー」
「どこから生まれてるの？お腹？しっぽ？」
「いつ卵から産まれるの？」
「赤ちゃん、早く見たい！」
卵を見て、「え～！？5個も産んだの？」
「すごーい！！お家で食べている卵と同じ形だねー。でも、ちっちゃーい」
「つるつるしてるねー」
「卵の中どうなってるの？」
「この中に、小さいカナヘビが入ってるの～？」



卵がグミみたいにやわらかい！！

「えー！卵、硬くない！！」「ちょっと柔らかい」
「グミみたいにポニョポニョしてる」
想像と違っていたことに驚いている様子。
「卵、少しずつ大きくなっているよね」と大きさの変化に気付く。

卵から赤ちゃんが！

夏休み中、卵から赤ちゃんが孵ったところをカメラとビデオで記録する。

恐竜みたい！～赤ちゃんとの出会い～（8/26）

卵から出てきた赤ちゃんを飼育ケースに入れ、子どもの目の届きやすいところに置いておくと、
「うわ～！ほんとだ～！ちいさ～い」
「触ってみた～い」
「何だか恐竜みた～い」
と、驚きと喜びの歓声が次々と上がる。赤ちゃんがここから出てきたことがイメージしやすいように、大分膨らんできて、まだ孵化していない卵も一緒に見せる。



ちょっと、かわいそう（9月中旬）

赤ちゃんが生まれたことで、餌となる虫捕りに、より意欲的になる。反面、秋になり、コオロギやバッタがたくさん出てきて捕まえているうちに、今度は捕まえた虫に愛着がわいてきて、「このコオロギ食べられちゃうの、かわいそう・・・」という言葉も聞かれるようになる。



考 察

- カナヘビは、隣の公園や幼稚園の敷地にも時々顔を出していたので身近な生き物ではあったが、生きていた物しか食べないため、飼育・観察という機会を設定していなかった。しかし、今回は脱皮を見たことをきっかけに、もう少し長く観察したいという思いから始まり、産卵や卵からの誕生も見ることができた。
- 飼育を通して自然界の面白さに気付いたり、友達とのかかわりが広がったりした。また、カナヘビの生態を目で、肌で、様々な感覚で感じることができる環境を作れたことがよかった。
- 餌捕りに夢中になり、意欲的に取り組む反面、次第に餌となる虫にも愛着がわいて、そこからも思いやりの気持ちが芽生えてきているように感じた。
- 幼児、保育者、保護者とともに、知ることの喜び、学ぶことの喜びを実体験を通して味わえたように思う。

みどころ

初めて飼育するカナヘビの様子や卵が大きくなっていく不思議を感じています。卵から孵った赤ちゃんに夢中で餌を捕っていた子どもたちでしたが、餌になってしまう虫へと思いが移っていきました。雑食・肉食系の生き物を飼育する際に、必ず子どもたちがぶつかる問題ではないでしょうか。「生きるためには食べなければならないこと」と「どんな小さなものにも命があること」の狭間で葛藤する子どもたち。食物連鎖に気付く機会にもなりますが、それと同時に小さな命を愛おしく思うことで「命」の大切さを学ぶ大事な経験です。